

『マビノギオン』の翻訳者シャーロット・ゲスト

吉賀憲夫

Charlotte Guest, the Translator of *Mabinogion*

Norio Yoshiga

**Abstract** : Charlotte Guest was a multi-talented woman. Though she is remembered as a great translator, educator, businesswoman, collector and philanthropist, her fame mainly rests on her translation of Welsh medieval legends known as *Mabinogion*. She started translating *Mabinogion* in 1838 and completed it in 1849 when she was 37 years old. *Mabinogion* was published in three volumes in the same year, but it did not gain much recognition in the 19<sup>th</sup> century. George Borrow made no mention of the book in his travel book *Wild Wales*. When she died in 1895, Charlotte was mentioned as a philanthropist and collector of planning cards, fans and china in her obituary in English newspapers but her translation of *Mabiongion* was never mentioned. However, Alfred Tennyson was strongly influenced by *Mabinogion* and he introduced the Welsh legend of Geraint and Enid from the book in his Arthurian epic, *Idylls of the King*.

翻訳家、教育者、実業家、蒐集家、慈善家として世に知られるシャーロット・ゲスト (Charlotte Guest, 1812-1895) は 1812 年に第 9 代リンジー伯爵アルバーマール・バーティと 2 度目の妻シャーロット・スザンナ・エリザベスの間に生まれた。1833 年、南ウェールズの製鉄業者ジョサイア・ジョン・ゲスト (Josiah John Guest, 1785-1852) とロンドンで結婚すると、ただちにウェールズに移り、夫の館で新婚生活を始めた。それと同時に、ウェールズ語を学び始め、一ヶ月も経つと、聖書のマタイ伝の一節を英訳できるほどになった。ウェールズ

語学習は順調に進み、これがのち、『マビノギオン』の翻訳へと続く。

当時、南ウェールズのアベゲヴェニーでは、オーガスタ・ホール (Augusta Hall, 1802-96) を中心にウェールズ文化保存の運動が押し進められていた。その一つとして、1836年にはウェールズ語の古写本の出版を目的とするウェールズ写本協会が発足し、同協会はその初仕事として、ウェールズ語の原文にその英訳をつけた中世ウェールズ物語集を出版することを決定した。そこで選ばれたのが「マビノギの四枝」 (*Pedair Cainc y Mabinogi*) の物語を含む古写本『ヘルゲストの赤本』であり、この翻訳を担当したのがシャーロット・ゲストであった。

しかし、この中世ウェールズ物語集の英訳へ試みは、決してシャーロットが最初ではなかった。彼女よりも前に、ウェールズ語辞書編纂家であり文法家であったウィリアム・オーエン・ピュー (William Owen Pughe, 1759-1835) が、部分的だが、その物語の英訳を *Cambrian Register* 誌や *Cambrian Quarterly* 誌に発表していた。そのとき、ピューは ” The Mabinogion, or Juvenile amusements, being Ancient Welsh Romances ” と「マビノギオン」 (mabinogion) という語を初めて使ったが、この ” mabinogion ” という命名に関しては、ピューの誤解があったようである。彼は複数の物語であるので、物語を意味する ” mabinogi ” に複数形語尾 ” on ” を付けたが、実は ” mabinogi ” 自体が複数形であった。しかし、彼のこの命名は定着し、それをシャーロットが踏襲した。そのため、今日、このウェールズの中世散文物語集は『マビノギオン』として世に知られることになる。それはさておき、彼女はこの物語集の翻訳の先達であるピューの編纂したウェールズ語辞書を使ってマビノギオンの翻訳に取り組んだのだが、しかし、ピューの翻訳は一切参考にせず、すべて一から翻訳を始め、全編の翻訳を完成するという偉業を成したのである。

これらの物語がいつ頃現在のようになつたかということに関しては、Ifor William は 1060 年頃とし、また Thomas Charles-Edward は 1060 年から 1120 年頃と推定しているように、おそらく 11 世紀末から 12 世紀の初期にかけて文字にされたものと考えられる。また、現存するこれらの物語の写本としては、『リゼルフの白本』と『ヘルゲストの赤本』の二つがあるが、前者は 1300 年から 1325 年頃、後者は 1400 年前後の写本とされている。

シャーロットが翻訳した『ヘルゲストの赤本』には 11 の物語があるが、その内容はケルトの神話や、アーサー王をめぐる最古の物語から、

中世宮廷ロマンス風の物語まで多岐に渡っているが、中核をなすのは、もっとも成立時期が古い「マビノギの四枝」と呼ばれる四つの物語である。「マビノギの四枝」の後に7つの物語が続く。これら11の物語のあとに、『ヘルゲストの赤本』には収録されていないが、ウェールズでは大変有名な物語「タリエシン」が付け加えられ、シャーロットの『マビノギオン』は合計12の物語で構成されている。

1838年の元旦にシャーロットの翻訳作業が始まった。12の物語のうち最初に取り上げられたのは、ヨーロッパに広く流布している『泉の貴婦人』の物語であった。テキストとしては、当時における最古の写本『ヘルゲストの赤本』を底本とする写本が使用された。まず北ウェールズのバラの聖職者ジョン・ジョーンズがこの写本の『泉の貴婦人』を読みやすく筆写し、それをシャーロットの許に送った。彼女はそれを英語に訳すのだが、この翻訳は同年2月6日に完了した。翌日、印刷と出版の手順について打ち合わせるために、聖職者でウェールズの言語や文化の擁護者であるトマス・プライスが彼女を訪問した。そのとき、完成した翻訳を2人でさらに推敲しているが、この手順がそれ以後の翻訳から出版に至るモデルケースとなった。シャーロットが翻訳を開始したのは26歳のときであったが、それから11年後の1849年に、すべての翻訳が完成した。

最初に取り組んだ『泉の貴婦人』の翻訳中に、シャーロットは次男となる4番目の子マーサーを出産した。それから37歳で翻訳を完成するまでに、第5子から第10子まで6人の子供を産んでいる。このように、この11年間は、翻訳と出産で心身の休む暇がなく、とくに妊娠にともなう体調不良や精神的不安定に悩まされ、ときには精神的鬱状態に陥った。しかし、彼女はそれらを克服し、この偉大な仕事を為し遂げたのであった。

シャーロットの翻訳にはウェールズ語のテキストと挿絵が付けられ、1838年から1849年にかけて12の物語が逐次出版された。さらに全作品の翻訳が終わった1849年には、それらのすべてが3巻本として出版される。また1877年に出版された『マビノギオン』第2版は、ウェールズ語の本文を省いた英訳だけの翻訳本となったが、その序文で、彼女は詩人テニスン(Alfred Tennyson, 1809-92)の『国王の牧歌』(*Idylls of the King*, 1859-1885)のゲライントとエニッド(Geraint and Enid)に関わる部分が、彼女の『マビノギオン』を下敷きにして書かれていることを世に知らしめたのであった。『国王の牧歌』はヴィクトリ

ア朝を代表するアーサー王物語であり、詩人テニスンを通じて、中世ウェールズ文学の魅力の一端が世に伝えられたのであった。

イングランドとウェールズにまたがる幅広い活躍もさることながら、異なる分野で輝かしい業績を上げ、人生の節目に全力で事に当たり、そのすべてにおいて非凡な才能を発揮し、かつ偉大な成果をあげたシャーロット・ゲスト（再婚しシャーロット・シュライバー）は、1895年1月15日に死去した。享年83歳であった。タイムズ紙はシャーロットの追悼記事で、初期の英国磁器や扇の蒐集家として、また慈善家としての彼女の晩年の功績を讃えたが、今日彼女の最大の業績として知られている『マビノギオン』の翻訳に関しては一言も言及しなかった。というのは、残念ながら、当時『マビノギオン』はイングランドではまだあまり知られていなかったからである。1854年にウェールズを徒歩旅行した小説家ジョージ・ボロー(George Borrow, 103-81)も彼の著書『ワイルド・ウェールズ』(*Wild Wales*)のなかで、シャーロットの『マビノギオン』にはまったく言及していないのである。彼女の翻訳が有名になるのは、ウェールズ語の原文を取り去り、英訳のみからなる第2版の翻訳版が出てからのことであり、さらに言えば、20世紀になってからのことである。一方、ウェールズの新報が、『マビノギオン』の翻訳を含め、彼女のウェールズでの偉大な功績を詳細に記述し、彼女への感謝と哀悼の意を表したのは言うまでもない。

## 『マビノギオン』の魔法

中野 節子

### *The Magic of the Mabinogion*

Setsuko Nakano

Abstract: *The Mabinogion*, eleven tales in all, deals with Celtic mythology, Arthurian romance, and a view of the past as seen through the eyes of Welsh people in their own language, Cymreig. The true value of these tales can be recognized in these genuine enunciations on the various historical events of the people of Wales. In those tales, Welsh people show how Wales responded to

conquest and colonization, and in so doing made a unique contribution to European literature, such as Arthurian romance. We might say *the Mabinogion* can be considered the cradle of European Romance.

These tales were originally told in oral transmission. The powerful effect of the conversation can never be ignored. However, here, I want to emphasize the most wonderful thing about these tales is the creation of the new hero, the hero fighting with wisdom and endurance, that is quite the opposite from previous heroes. He never fights using his physical strength. We can recognize that hero image clearly in the 'Manawydan tale' of the first group of *the Mabinogion*. Therefore, *the Mabinogion* can be considered to be a present from the conquered and 'colonized' people of Cymru to the powerful conquerors, the Anglo-Norman 'colonizers'.

#### A 『マビノギオン』の魅力

ときどき、かれこれ 40 年ちかくこの物語に魅せられつづけているのはどうしてだろうと不思議に思うことがあります。その理由として考えられるものいくつかを、今日はお話してみたいと思います。

1) ウェールズ語 (カムライグ) で記された「擬似歴史書」として 6 世紀にまとめられたギルダスの『ブリテン崩壊について』からはじまって、9 世紀、ネンニウスの『ブリトン人の歴史』、そして 12 世紀、モンマスのジョフリーの『ブリテン諸王の歴史』等、ウェールズについての記述が見られる歴史書は数が限られており、いずれもラテン語を使って、一方的にまとめられた文献であるために、カムリ人から見た視点というのが一向に伝わってこないというのが正直なところです。しかし、中世に一冊の本にまとめられたと考えられている、『マビノギオン』所収の 11 篇の物語には、代々この地に語り継がれてきた出来事、ものの考え方などが、他ならぬカムリの人々の手によって、彼らの言葉を使って、生き生きと描かれているのです。まさに、カムリ民族の心とその生き方を、私たちに直接に語ってくれている、「擬似歴史書」ということができるでしょう。

『マビノギオン』の核となる、第一グループ「カムリに伝わる四つの物語」には、彼らが信じていたケルトの神々の姿と人々との交流の様子などが、一人の英雄の一生を語る物語を通して描かれています。

そんな中で私たちは、カムリの社会で重んじられていた礼節・風習・問題解決の仕方等を知ることができます。その上、いずれも忘れ難い数々のエピソードとともに語られているため、鮮明なイメージとして、脳裏に刻みこまれるのです。それは無味乾燥とした歴史の記述とは全く異なる種類のもので、こんなところに強く惹き付けられるのかもしれない。一見、荒唐無稽と思われるようなこんな話の中にこそ、カムリ人の真実の姿がとらえられているように思われます。

## 2) 語り（声）の文化の魅力

これらの物語は、ウェールズの社会で大きな役割を持っていた、バルドと呼ばれる詩人たちによって、長い年月をかけて口承で語り継がれてきました。その中には、声の文化を何よりも重んじた、カムリ人の言語文化の粋が見られます。それらは、文字に書きとめられた文献の中に現われているものとは、全く質を異にするものと言ってもよいでしょう。考えてみると、その様子は、物語の部分と歌謡が入り混じって展開される、日本の文芸ととても似ているように思われます。日本の俳句を思わせる、ウェールズ最短の短歌形式エングレンなども姿をあらわします。しかしなによりも印象深いのは、物語の中に再三現われ、語りに弾みと色彩を添えて、物語の力を盛り上げている会話の魅力ではないでしょうか。例えば、アーサー王が最初に登場すると目される、「キルッフとオルウェン」の物語の中の、巨人の長イスバザデンと若者キルッフの会話などが思い浮かびます。娘をやるまいとして、次々に難題を投げかける父親の必死な様子、恋に駆り立てられ、何にでも挑戦してやろうと気負う若者の熱気などが髣髴と立ち現れてくるのです。ユーモアと哀愁とが微妙に交錯した、臨場感が伝わってくる名場面だと思います。

## 3) 反転と回転の繰り返し

『マビノギオン』冒頭の第一話に登場してくる、猟犬の耳の赤と体の白という色彩のコントラストの鮮烈なイメージ等、11篇の物語には目を奪うような色彩の乱舞が見られます。その中でも、特に印象的なものとして、第三グループの「ペレドゥル物語」で、主人公のペレドゥルが冒険の旅に出てゆく際に目にする、「片側は根もとから梢の先まで真っ赤に燃え、もう一方の側には緑の葉」のついた一本の高い樹があげられます。また、川を越えると黒い羊は白に、白い羊は黒になるという反転のイメージも忘れ難いものです。それらの不思議な印象は、これからのペレドゥルの冒険の困難さとともに、そこで展開される華

麗な魔法の世界を予感させる効果を持っています。

#### 4) 英雄・美女・怪物たちの活躍

『マビノギオン』のいくつかの物語に登場してくる、荒々しいアルスルの家来たちの姿からは、後にヨーロッパ全域を席卷する「アーサー王物語」の、洗練された騎士の雰囲気は全く感じられません。そんな語りの中では、古い物語の勇者たちの力強さが、いやがおうにも高まってきます。また、全く新しい英雄像、すなわち武力でもって戦わない英雄として登場してくる、マナウィダンの姿なども忘れ難いものです。

巨人の妹ブランウェン、巨人の娘オルウェン、花のエッセンスから作り出されたプロダイウェズといった美女たちの姿もきわめて魅力的です。猪の長トルッフ・トロイス狩りの様子も、わくわくするような臨場感を持って迫ってきます。とにかく、この『マビノギオン』の物語は、世界に冠たる幻想ファンタジーの宝庫であり、後の「ロマンス」を生むゆりかごであったことが分ります。

#### B) 征服された人々からの贈り物

ご存知のように、ブリテン島の先住民族の一つカムリ人は、度重なる侵入民族との果敢な戦いの末、最後にはアングロ・ノルマン人に征服され、併合の憂き目を見た民族でした。もともと、常に部族ごとに結束して、独自のやり方で生活し、決して一人の指導者のもとで、統一社会を形成することのなかった自由の民なのです。彼らの歴史は、長く続いた種族間の激しい攻防、アングロ・サクソン人やノルマン人という、巧智に長けた為政者たちが仕掛けた裏切りの模様を生々しく記録しています。結局、これらの骨肉の争いが災いして、民族としての真の独立を達成することができなかつた人々なのです。そんな歴史を悼むが如く、『マビノギオン』の物語の中には、他の英雄物語には現われてこない、消極的で、徹底的に争いを避ける英雄像が生まれてきたように思われます。もっとも顕著な例は、「四つの物語」の第3話に登場する「マナウィダン」という人物でしょう。アイルランドとの戦いで勝利した後、わずかな人々とウェールズの地に帰ってきた彼は、この「強者の島」が、自分の兄弟を殺して統一者となった、従兄弟の手によって治められているのを知ります。無駄な争いを徹底的に避けて、彼はプレデリの生母、未亡人になっているリアンノンと結婚します。二組の夫婦は、しばらくウェールズの地で生活をしていましたが、

やがて新たに生計を立てる手段を探して、イングランドの地を再三訪れるようになります。しかし、その地で職人たちとの間で争いが起きるようになると、すぐに他の場所に移ることを主張して、他の三人から糾弾されます。特に、妻のリアンノンと嫁のキグヴァという女性たちからはさんざんに非難されるという有様です。しかし、最後にはこの知恵と才覚をもって、忍耐つよく問題を解決していったマナウイダンによって、ダヴェドの地にかけていた呪いは解かれ、行方知れずに姿を消していたブレデリとリアンノン母子も無事戻ってきて、この地に平和が訪れることになったと語られています。そこには、血で血を洗うような争いに明け暮れたカムリの人々が、自らの苦い経験から学んだ、未来に向けての問題解決のメッセージが見られるように思われます。それこそが、圧倒的な大きな権力の前に征服されてしまったカムリの民からの、貴重な贈り物であったのです。

考えてみると、「アーサー王伝説」に登場してくる、数々の騎士や貴人たちの原型となっている、『マビノギオン』物語の中の人物たちも、何と欠点の多い人たちであることでしょう。中でも最高に問題の人物が、当のアーサー王（アルスル）なのです。そこには、グウィズブイスという盤上のゲームにかまけて、自分の家来がからず軍団に襲われるのを放置するアルスル（後のアーサー王）、相手の面子を丸つぶしにする心無い冗談を言って、誇り高い腹心の部下カイ（後のケイ）の心を傷つけてしまう、思慮を欠いた主人アルスルの姿が描かれています。このような数々のエピソードの中に、人間の本質的な弱さが垣間見られるところが、『マビノギオン』の物語の最大の魅力であると思われま

す。

『マビノギオン』の成立年代については、さまざまな説があり、いまだに明確な結論はでておりません。しかし、今のところ、これらの口承の物語は、14世紀から15世紀頃にかけて、南ウェールズの地で書きとめられ、一冊の書物の形になったのであろうと推定されています。ときまさしく、カムリの人々が自立への望みを託した「最後のプリンス」スウェリンが、ノルマン系の為政者に敗れ去り、一家が無残な最期を遂げた時代に重なるのです。彼の娘グウェンシアンの、56年間の幽閉の悲劇に象徴される、人々の悲しみのうえにまとめられたのが、この一冊の幻想物語集であるように思われてきます。そこにこだまするのは、いつの日にか訪れるにちがいない、再興の日を渴望する、征服された民族カムリの人々の、切なる「待望」の願いなのです。



## 編集後記      Ôl-nodyn Golygyddol

「日本カムライグ研究」*Bwletin y Gymdeithas Astudiaethau Cymreig Siapan* 第4巻第2号をお届けいたします。本号は2008年5月17日（土）に大東文化大学にて行われました「第7回例会」でご発表された方々より、その「要旨」をご投稿いただきました。ご多忙の中、ご投稿いただきました皆様に厚くお礼申し上げます。なお、本号の「落穂拾い」は諸般の都合により次号への掲載となりました。今後とも会員の皆様のお力添えを賜りますようよろしくお願い申し上げます。

編集担当幹事    奥村   朋恵

## 日本カムライグ研究

第4巻 第2号      ¥500.- (送料別)

2008年10月25日 印刷 編集担当幹事 奥村 朋恵  
2008年11月1日 発行 発行所 日本カムライグ学会  
〒175-8571 東京都板橋区高島平 1-9-1  
大東文化大学文学部英米文学科 小池剛史研究室内

吉賀憲夫 『マビノギオン』の翻訳者シャーロット・ゲスト」

***Bwletin Cymdeithas Astudiaethau Cymreig Siapan***

Cyfrol 4 Rhif 2, y Gyntaf o Fai, 2008

Golygyddes: Tomoe Okumura

Cymdeithas Astudiaethau Cymreig Siapan

t/o Takeshi Koike, 1-9-1 Takashima-Daira

Itabashi-ku, Tokyo, 175-8571

Cyfadran Llenyddiaeth, Adran Llenyddiaeth Saesneg ac Amerig

Prifysgol Daito Bunka